



阿部 綾子氏
福島県立博物館
主任学芸員

芸員として勤務して、8年目です。若松城というより「鶴ヶ城」の名で知られていると思いますが、その天守閣の内部が博物館になっていることをご存じの方は、少ないのではないのでしょうか。少しでも若松城に関心を持っていただければ、日々勉強しているところです。新島八重の研究に関しては、同じ女性という観点で取り上げてはどうかということ、私が担当しています。今年の9月には企画展も行いました。会津の歴史において、幕末という時代は一つの大きな部分を占めています。その中で、女性がどう関わっていたのか。分かりにくい部分が多いとは思いますが、史料を通して分かることを皆様にご紹介できるように、勉強を続

けているところです。
小枝 ●私も2003年に同志社社史資料センターで働き始めてから8年目ということに、いま気づきました。現在は八重の史料を整理するというよりは、その史料を対外的に活用するような仕事をしています。2012年は9月に、全国に先駆けて福島県の二本松市と白河市で特別企画展「新島八重の生涯と戊辰戦争展」が開催されました。主催は福島県と両市、福島県観光物産交流協会で、両方の会場を合わせて100点以上、八重・襄陽連の資料が展示されました。阿部さんには二本松でお世話になりましたし、湯田さんにも資料をお借りするため何度か相談したことがありません。2013年は大河ドラマ放送の本番ですが、東北・福島にエールを送るというドラマの主旨に賛同し、我々も八重の展示をするときは、この視点が大事だと考えています。今日はそのようなことを心に留めながらお話ができればと思います。
露口 ●皆さんそれぞれ、お仕事をしている年数も同じくらいなのですね。さて、本日は3つのテーマを考えています。一

つ目は近世会津の風土、二つ目は幕末、特に戊辰戦争について。そして三つ目が八重自身について。三つ目は会津時代の八重と同時に、京都時代の八重、そして京都で暮らす八重にとっての会津を考えたいと思います。
まず近世会津の風土について、少し予備知識を持ちましょう。八重に関する史料から語れる会津は狭い範囲でしかありませんが、もう少し広げて会津の風土、地理的環境についても、私たちは知る必要があると思います。24歳まで会津にいた八重は、どんな四季を過ごしたのか、どんなふうに住ったのか。阿部さんは会津の風土を、どのように感じておられますか。
阿部 ●まず現在の福島県ですが、日本では北海道、岩手県に次いで3番目に広い面積を持っています。その中で東から、浜通り、中通り、会津という三つの地域に分かれています。最も新潟県寄りに位置しているのが会津です。会津若松は盆地で、冬は雪に覆われて寒く、夏は暑いという、四季を体感できる土地でもあります。現在の福島県では白河、郡山、福

八重と会津

会津の武家の子として生まれた新島八重(旧姓山本)。八重の人生を語る上で欠くことのできない「戊辰戦争」を中心に、八重のふるさとである会津について、歴史的側面から語っていただき、人物像を深める企画とした。

出席者

- | | | |
|------------|------------|-------------------------|
| あべ
阿部 | あやこ
綾子氏 | (福島県立博物館主任学芸員) |
| ゆだ
湯田 | さちこ
祥子氏 | (若松城天守閣郷土博物館学芸員) |
| こえだ
小枝 | ひろかず
弘和 | (同志社社史資料センター社史資料調査員) |
| つゆくち
露口 | たくや
卓也 | (大学文学部教授、同志社社史資料センター所長) |

司会

八重を育んだ会津の風土

露口 ●本日は会津から、お二人の方が来てくださいました。それぞれ学芸員や調査員をしておられ、現場に立って様々なことを考えておられます。さらに今年は新島八重の展示に関わるなど共通点を多くお持ちなので、本日はどのようなお話を伺えるか、とても楽しみです。まずは皆さん、自己紹介をお願いします。

阿部 ●福島県立博物館で学芸員をして、8年目になります。県庁所在地は福島市ですが、県立博物館は会津若松市の、鶴ヶ城の三の丸跡地にあります。私の担当は近世、江戸時代です。最近では、江戸時代初期の会津藩主で会津松平家の祖である保科正之の展示の企画などに携わりました。今日のお話にも出るかもしれませんが、新島八重と、会津藩の藩足である家訓との関係は、八重と会津を語る上で一つの大きなポイントになると思います。家訓は保科正之が定めたもので、そういつた観点から、今後は家訓の研究なども進めたいと考えています。
湯田 ●私も若松城天守閣郷土博物館に学

島のある中通りが一番の幹線になっていますが、江戸時代は会津藩が一番石高の多い大藩でした。城下町としても、一番人口が多かったんですね。それまでも「奥州の喉元」と言われ、時の政権から重視された土地でしたし、豊臣秀吉も徳川将軍家にしても、会津には信頼のできる大名を配置していました。物流面でも、越後街道を通じて新潟へ出ると、そこからは日本海海運によって京都方面にもつながっており、また白河街道・下野街道・米沢街道・二本松街道など主要街道の結節点でもあつて、交通の要衝でした。

露口●戊辰戦争でも、会津に攻め込んでくる戦いがいくつもありましたね。越後、日光、白河、二本松。これらも会津へ通じる街道の入口であつたのですね。会津の物産についてはどうですか。会津は近世の初め頃に城下町の町割りを行い、武士の住む郭内と町人の住む郭外とに分けましたね。郭内と郭外は、堀や土塁などで仕切られていた。郭外での産業はどうだったのですか。

阿部●会津ではお城の北側に町が開けていました。越後街道沿いの七日町には宿

屋が多数ありましたし、塗り職人の多いところ、問屋の多いところなど、郭外には職種ごとに町が展開していました。城下町です。文化も花開きました。福島県立博物館でも、会津塗の漆器や文人の書画などを収蔵しています。

湯田●酒造りも発展しましたし、江戸時代は朝鮮人参の栽培に成功したおかげで、輸出が貴重な財源になりました。人参役所という部署も設けられたほどです。現在も薬用人参の栽培が行われており、伝統産業となっています。

阿部●会津藩第一の産物というと、やはり蠟ですね。会津藩では会津塗に使う漆の樹液をととても大切にしましたが、同時に実も非常に大事にしまして、この実が蠟燭になりました。これが会津藩の代表的な産物になっていました。

小枝●会津は、漆器にしろ、絵ろうそくなど様々なモノ資料から時代の空気を感じ取れるものはありますね。八重も、同じ空気にふれたのではないのでしょうか。八重研究において、そういうことを理解するのは興味深いですね。

露口●そういう職人町と武家町との交流

はあつたのでしょうか。

阿部●直接には、それほどなかったと思います。もちろん郭内への出入りを許された商人がお武家さんの屋敷に行くことはあつたかと思いますが。

露口●八重が郭外に出ることはあつたのでしょうか。

湯田●高い家格の生まれだったので、町人と気軽に交流できる立場ではなかったと思います。八重は女性でもありましたし、目立った動きはすべきではないという風潮は強かつたとも思います。

露口●旅人もたくさん会津を通つたのでしょね。

阿部●旅人も物資も、たくさん会津藩の領内を通りました。保科正之の時代の政策の一つには、会津に来た旅人を大切にすることをあり、病気になる旅人は看病することになっていました。

露口●参勤交代はどうだったのですか。

阿部●保科正之だけは例外で、4代将軍家綱の補佐を務めた時はずっと江戸住ままで、20年以上会津に帰りませんでした。2代目以降の藩主は通常の参勤交代を行っています。

会津のよりどころ

「家訓十五箇条」

露口●初代藩主、保科正之の話に入っていきます。保科と徳川幕府の関係、あるいは会津藩と幕府との関係について。保科正之の定めた家訓の第一条は、大変有名ですね。この家訓十五箇条について、

少し説明していただけますか。

阿部●家訓は正之が晩年に制定したもので、形式的には会津藩の家老たちに宛てて書かれており、政治にあたる際の心構えが説かれています。私が会津に来た当初に家訓について一番知りたと思ったのは、よく耳にした「家訓は会津藩の憲法であり、絶対的な教えである」という

ことについてでした。これを皆、最初から本当に遵守したのかどうか。そこで、会津藩の正史である『家世実紀』などを調べていきました。

露口●会津藩にとって家訓は、それぞれの時代の中でどの程度、意識されていたのでしょうか。

阿部●幕末になってきますと、家訓は絶

会津家訓十五箇条

- 一、大君の儀、一心大切に忠勤を存すべし、列国の例を以て自ら處すべからず、もし二心を懐かば則ち我が子孫に非ず、面々決して従うべからず
- 一、武備を怠るべからず、士を選ぶを本となすべし、上下の分を乱すべからず
- 一、兄を敬い、弟を愛すべし
- 一、婦人女子の言、一切聞くべからず
- 一、主を重んじ、法を畏るべし
- 一、家中風儀を励ますべし
- 一、賄を行ひ媚を求むるべからず
- 一、面々依怙鼻肩すべからず
- 一、士を選ぶに、弁辟弁佞の者を取るべからず

- 一、賞罰は家老の外これを参知すべからず、若らば位を出る者あらばこれを厳格にすべし
- 一、近侍の者をして人の善悪を告げしむべからず
- 一、政事は利害を以て道理を枉げらるべからず、僉議は私意を挟み人の言を拒むべからず、思う所を蔵さずして以てこれを争うべし、甚だ相争うといえども我意を介さむべからず
- 一、法を犯す者は宥むべからず
- 一、社倉は民の為にこれを置き永利と為すものなり、歳饑は則ち発出してこれを濟うべし、これを他に用うべからず
- 一、もしその志を失い遊樂を好み驕奢を致し、士民をしてその所を失わしめば、則ち何の面目あつて封印を戴き土地を領せん、必ず上表して蟄居すべし

対的なものになってきます。たとえば藩主の代替わりときは、重臣たちが家訓を前にして誓詞血判をします。正月には藩主も正装のうえ居ずまいを直し、家訓の拝読式を行う。家老が初めて職に就くときは、正之の画像を前にして、家訓を広げて誓詞血判を行った。かなり浸透していたものと思われず。

ところが正之が亡くなってすぐくらの時期、江戸時代の初め頃ですと、誓詞を拒否した重臣もいました。というのは家訓第一条に従うことができないと。第一条は將軍家に絶対的な忠誠を誓うという内容ですが、その後、もし従わない藩主がいれば、その藩主には従うなど書いてあるわけですね。家臣として藩主には絶対に従うべきなので、第一条は受け入れられないと言って、誓詞血判を拒否したそうです。

露口 ●ほお、言いますね。

阿部 ●それで重役を降りたようです。降ろされたのかもしれませんが。ところが時代が進んでいくと、無条件で誓詞血判を行うようになった。そういう意味では、江戸の初期、中期、後期で、ある

程度違いが生まれてきたのではないかと思います。

露口 ●十五箇条全般で述べているのは、道徳訓でしょうか。

阿部 ●そうですね。第一義的には、会津藩を統治する上での心構えを重臣たちに説いた内容になりますが、それが広く、多くの人に行きわたったものと思われず。

徳川將軍家の血縁として 会津松平家に求められた役割

露口 ●第一条も含めて言いますと、要するに藩の憲法なのだから、これはむしろ藩主を縛りつけるような規則であるわけですね。將軍に従わない藩主には従わなくていい、と言っているわけですから。そこが大きなポイントであろうかと思えます。

さて、会津藩が幕府のバックアップをしたことについては、どのような事実があったのでしょうか。初代藩主の保科正之は、徳川第2代將軍秀忠の子ですね。秀忠の存命中は実子として認められず、

せん。ただ、これも『家世実紀』に書いてあることですが、3代藩主正容の時代に、幕府の儒官だった林信篤という人が、会津藩の財政が苦しかったことに對して苦言を呈したことがあります。会津松平家は「公儀之御血統ニ候間、公方様之御身上同前」と。徳川將軍家の血筋であるから、將軍の身の上と同然であるというわけですね。続いて「只今静成代ニ候故何之事も無之候へとも、若非常之時其御勤被成候段、御血脈之筋目と申二而、御名代ニ御立可被成御家」とあります。会津松平家は公儀の血統であるので、ひとたび有事が起きれば、將軍の名代に立つべき家柄である。だから、それを自覚して非常時のために普段から儉約に努め、家来を統率して軍をすぐに動かせるように、十両を用意できるような財力を蓄えておかなければならない、と意見したのです。これが、当時の会津藩の立場であると言ひ換えることができると思います。そして、この関係が幕末につながってくると考えていいでしょう。

露口 ●幕末へ向けて、どんな動きがありましたか。

阿部 ●武力を期待された会津藩は、特に19世紀に入ると、外圧に對する備えとして蝦夷地出兵をしますし、房総の湾岸警備にもあたり、実際に武力を期待される場面が幕府から与えられていきます。その最たるものが、幕末の京都守護職です。それまで京都の治安を守る役職としては京都所司代がありましたので、そこに任せればいいはずですが、それだけでは京都を守りきれなくなりました。そこで有事の際には將軍家の代わりとなる会津藩を、京都所司代よりも上級の地位に就けて、京都の防備に当たらせる目的で生まれたのが京都守護職でした。これは新設の役職です。これによって、奇しくも最初と最後の藩主が幕府の中枢に入ったと言えらると思います。

家訓を盾に押し切られた 京都守護職就任

露口 ●なるほど。そこで湯田さんにお聞きしたいのですが、京都守護職への就任を、松平容保は懸命に何度も辞退しますね。でも、中央政權に関わっていた福井

最初は信州高遠の保科家で養子として育てられた。3代將軍家光に弟として認められ、会津を与えられた。そして3代藩主の時代から、既に幕府から認められていた松平姓を名乗るようになったのですね。

阿部 ●正之に始まる会津松平家の歴史において、幕府との関係で特徴的なことがありました。それは、幕府政治の中枢に関わる立場にあったのは、初代の正之と9代の容保の二人だけだったということですね。正之の時代は、やはり4代將軍家綱の補佐をしたことが一つの大きな特徴でした。その頃、まだ幕府では大老職が固まっていた時期でしたので、正之の役職や立場もはつきりと定まっていなかったが、いずれにしても正之が幕府の中枢で果たした役割は、2代目には引き継がれません。ここは大きな特徴だと思えます。

露口 ●2代目以降の藩主たちは、どのような立場にいたのですか。

阿部 ●幕府に對してある程度オブザーバーのような立場は取ったかもしれませんが、具体的な政權運営には関わっていま

藩主の松平慶永が、ずいぶん容保を説得した。そこで家訓が大きなポイントになるんですが、そのとき慶永は、どういう言い方で容保を説得したのですか。

湯田 ●保科正之公が定めた家訓第一条を持ち出し、正之公だったら受けたであろうと説得しました。家訓を盾に迫ったと言って差し支えないと思います。容保は、就任を受け入れざるをえない状況をつくられてしまった。そこには、容保が養子であったことも大きく影響していると思えます。

露口 ●8代会津藩主の甥だった容保は、他藩から会津藩へ養子に来たのですね。
湯田 ●会津藩の命運を、自分は握っている。そこで、自分の代で会津藩をどうに



湯田 祥子氏
松城天守閣郷土博物館
若松学芸員

かしてしまつてはいけないという思いが、最初から会津で育った人よりも強くあつたと思います。そこで藩祖の作った家訓を盾に取られると、もう断りようがなかつたところではなかつたでしょうか。

露口 ●家訓の第一条にあるような幕府守護という認識が、会津藩に伝統としてあつたことは間違いないでしょう。ただ、その中身ですね。林信篤は、非常時にあなた方は幕府の武力になつて働くんだよ、という言い方をした。このように、近世においては他藩にも、会津藩はそういう藩なのだというイメージがあつたのでしょうか。

小枝 ●それは僕も知りたいですね。すべの藩が、会津藩は保科正之が開いた藩だという意識が強かつたのか。僕たちは家訓の中身を重視しますが、正之から9代も経た容保の時代でも、なお国中に、会津藩については初代正之のイメージがあつたのでしょうか。それなら、家訓を盾に迫つた話も納得できます。すごい圧力があつたのだらうと思います。

湯田 ●これは個人的な考えですが、他藩がもつていた役割、業績がそこに凝縮されていると、僕は思います。京都守護職に就いた会津藩は、あのように遠いところから京都まで大量の兵を送つたわけです。兵は1年おきに交代はしましたが、もつと近くに、京都を警護しにいける藩もあつた。近畿近辺の藩を持つてくるのが一番いいと思うし、近くの大きな藩なら、彦根藩という手もあつたと思うんですね。その方が、よほどスムーズに京都を警護できる。徳川御三家の藩でもよかつたわけですが、でも、選ばれたのは会津藩だつた。それだけ会津が京都守護職に就いた意味が大きかつた。幕府への忠誠を保ち続ける気風が強く信頼された。これは特殊な話だと考えるべきでしょう。そうでなければ、よく理解できません。

阿部 ●会津松平家と徳川将軍家との関係で、一つ特異なことがあります。将軍家の世継ぎの元服式では、「加冠之役」と「理髮之役」という大切な役がありました。理髮之役とは髪を整える役です。徳川将軍家では4代将軍家綱の時に初めて盛大な元服式が行われ、理髮之役を保科正之



小枝 弘和
同志社大学資料センター
社史資料調査員

における会津藩のイメージは、時代によつて差があつたと思います。幕末にかけて、会津は積極的に湾岸警備を受け持ちました。つまり、会津藩がさらに武力をもつて幕府の力になれることを内外に示せる時代に突入していった。そういった意味での会津藩に対する意識は、全国のとまではいかなくても、幕府の中枢に近いところでは認識されていたのではと思います。ただ、江戸中期や幕府が盤石だつた時代に、それが全国的に意識されていたかどうかは疑問に思います。

露口 ●近世の各藩では、たとえば水戸なら光圀という人の存在が大きく、彼が藩のイメージをつくつていました。同様に、会津は保科正之というビッグスターの藩

が務めたのです。それ以来、加冠之役は彦根藩の井伊家、理髮之役はずっと会津松平家が務めました。室町時代、足利将軍家の世継ぎの元服式における加冠之役や理髮之役は、政権の中枢にいた人物、つまり管領が務めるのがスタンダードでした。家綱の元服の際は、家光がいわば家綱の後見を託せる人物として、井伊直孝と保科正之を両役に任命したのだと思います。

露口 ●家綱が元服した時はまだ幼く、將軍職に就いた時でさえ、まだ11歳（数え年）でした。

阿部 ●2代将軍秀忠と3代将軍家光は、將軍職に就いた時には父親が御所としてまだ政権に携わっていました。いわば、父親の後ろ盾があつた上での就任です。ところが4代将軍家綱は、父親が亡くなつてから將軍職に就いた。そこで、父親に代わるような強力なバックアップが必要だつたんですね。そのような補佐役を正之が担つた。このことをもつてしても、もし何かあつたときには後見として働くべき家柄であるということ、將軍家は会津松平家に求めたと思います。それが

だつた。そのイメージは他藩から見れば、全国的に絶対的なものだつたと思います。ただ正之は、立派な編纂物も作つた文化人でした。でも、京都守護職をすることになつた時の会津藩は、武力、兵力を大変期待された。会津藩が京都守護職に指名されるまでの経緯は、ある程度分かるものなのでしょうか。いくつかの藩が選挙として挙げられた上での決定だつたのでしょうか。

湯田 ●先ほども申しましたが、その前に会津藩は房総半島などの警備にあつていました。実際に戦闘は経験していません。でも、そういう力を内外に示すことができたという実績があつた。京都守護職をやりたいと考えた外様藩もあつたようなので、選挙には会津藩も他藩もあつたけれども、いざ危急の事態になつたときに、武力をもつてそれを排除する役割を信頼して任せられる藩となると、本当に限られていた。そこで、正之公の定め家訓が守られてきた会津藩なら絶対的な信頼がおけるといふ点で、他の藩は考えられないという選択になつたのではないかと思います。

会津藩の負わされた責任だと考えていいでしょう。そういう意味でも、血筋ということもあり、將軍家にとつて会津松平家は非常に特殊な、とても頼りにすべき家柄だつたといふことは指摘できると思います。

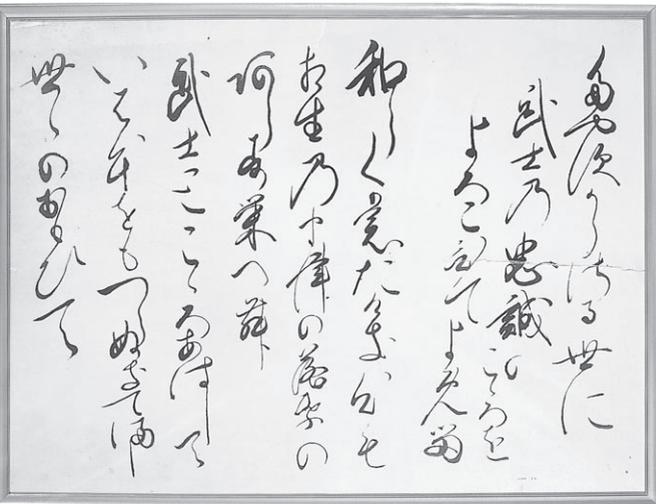
孝明天皇崩御で一転した 会津藩の運命

露口 ●会津が京都守護職になつた時の、朝廷や孝明天皇との関係はどうだつたのでしょうか。

湯田 ●幕末になると、朝廷との関係は形骸的なものになつてしまつたのではないのでしょうか。

露口 ●ただ松平容保は、孝明天皇との関係が深かつたですね。福島県で行われた展示にもありましたが、容保には孝明天皇から御宸翰も送られました。あの御宸翰ほど歴史を証言しているものはない。そういう意味で大事なものだと思います。

湯田 ●あの御宸翰は、孝明天皇が容保の京都守護職としての働きに感謝され、容保に篤い信頼を寄せていることを示すも



孝明天皇御製(写本)(会津若松市蔵)

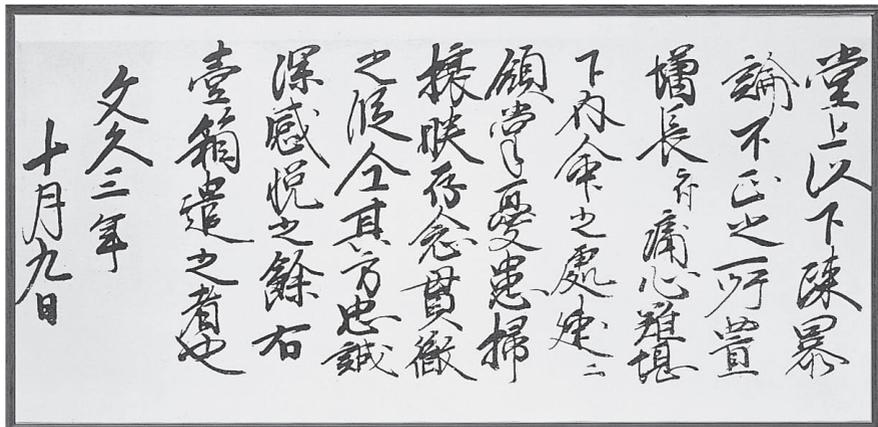
の立場はまったく変わってきましたし、周囲の状況も一変しました。やはり最終的には、会津藩は幕府に身をささげる部分が大きかったと思います。会津藩と朝廷との良好な関係は、將軍家茂と孝明天皇が亡くなるまでの期間に限定されると

会津藩が負わされた時代の幕引き

思います。その後はもう、戊辰戦争に突入していつてしまいました。

露口 ●戊辰戦争は1868年の鳥羽・伏見の戦いに始まり、薩長の新政府軍の勝利によって、会津藩は「朝敵」にされた。新政府軍は会津を討つため東進を続け、ついに会津戦争に至ります。会津戦争の中で、これは致命的だったと考えるの戦いはどこでしょうか。
湯田 ●8月21日(※旧暦)の母成峠(ははなりがたけ)の戦いは、一つのポイントだと思えます。ここを破られたことが、新政府軍の直接的な侵入を許すことになってしまった。会津藩はまさかそこから攻め込まれるとは思っておらず、戦略上の弱点をたまたま突かれてしまった。そこでの戦いは、まったく勝

されていないものは二、三ではないですね。たとえば尊王攘夷派を京都から追放した1863年の「八月十八日の政変」の後では、会津はよく働いてくれたという一節があったりする。孝明天皇から他の藩主に宛てた御宸翰でも、孝明天皇の会津藩に対する気持ちが分かるような史料はビックアップされていますか。
湯田 ●徳川將軍家に残されている御宸翰があり、うちの天守閣でも展示させていただいています。
露口 ●京都守護職時代、会津藩と孝明天皇との関係が良好だったことだけは確かですね。ただ、朝廷が幕府かという局面になったとき、会津藩はどちらにいったのか。容保は徳川慶喜と、少なくとも盟友関係は結んでいる。孝明天皇とも意思の疎通をしている。政治的には、この二者を講和させるのが容保の何よりの願いですよね。だけど、そうはいかない政治情勢があったときに、僕は、やはり会津は幕府に付いたと思う。
湯田 ●会津藩が朝廷と良好な関係を結んでいたのは孝明天皇の存在が大きかったわけですから、孝明天皇の崩御後、容保



孝明天皇御宸翰(写本)(会津若松市蔵)

のです。代々、松平家で大事に保管されてきました。戊辰戦争の際、松平家が財政的に大変苦しい時期にあっても、それだけは絶対に手放すことがありませんでした。また、天皇が会津藩主を信頼していることが書かれているという事は、新政府にとつては大変都合の悪い史料だったわけですね。そこで後年、政府が御宸翰を買い取ろうという動きもあったのですが、容保はそれだけは断ったそうなんです。
露口 ●孝明天皇から容保に送られた御宸翰は、あの一通だけですか。
湯田 ●会津の松平家に伝来するものは御宸翰が一通と、同時に御製も贈られています。「和らぐも たけき心も相生の まつの落葉の あらず栄へむ」と「武士と ころろあはして いはほをも つらぬきてまし 世々のおもひて」という和歌です。孝明天皇は御宸翰は少なからず発布されていますが、御製はなかなか見られません。それだけ容保に対する高い信頼と、感謝が込められていました。
露口 ●孝明天皇の御宸翰で会津に言及

されているものは二、三ではないですね。たとえば尊王攘夷派を京都から追放した1863年の「八月十八日の政変」の後では、会津はよく働いてくれたという一節があったりする。孝明天皇から他の藩主に宛てた御宸翰でも、孝明天皇の会津藩に対する気持ちが分かるような史料はビックアップされていますか。
湯田 ●徳川將軍家に残されている御宸翰があり、うちの天守閣でも展示させていただいています。
露口 ●京都守護職時代、会津藩と孝明天皇との関係が良好だったことだけは確かですね。ただ、朝廷が幕府かという局面になったとき、会津藩はどちらにいったのか。容保は徳川慶喜と、少なくとも盟友関係は結んでいる。孝明天皇とも意思の疎通をしている。政治的には、この二者を講和させるのが容保の何よりの願いですよね。だけど、そうはいかない政治情勢があったときに、僕は、やはり会津は幕府に付いたと思う。
湯田 ●会津藩が朝廷と良好な関係を結んでいたのは孝明天皇の存在が大きかったわけですから、孝明天皇の崩御後、容保

かが、その戦いに身を置かざるをえなかった。徳川幕府からあれだけ信頼されていながら、なぜ会津がここまで打ちのめされなければならなかったのかという、個人的な感情はあります。しかしこれらの戦いは、誤解を恐れなければ、ある意味、時代のけじめであった。業を背負ったのが彼らだったのでは思うのです。だから会津藩も、白虎隊も二本松少年隊も、その存在を僕たちは認識しておかないと、今の時代を語れないのではないのでしょうか。

鶴ヶ城で戦った女性たち

露口 ●1か月間にわたる籠城戦で一つ驚くべきことは、会津藩は圧倒的に不利な兵力で1か月も持ちこたえたことです。圧倒的に周辺を固められ、新政府軍にはもの凄く大砲があるにもかかわらず、鶴ヶ城は1か月間、落ちなかった。この事実は重いだろうと思います。その間、八重たちは一生懸命に城内で戦っていた。八重はこの籠城時の様子を、明治時代になつて何度か語っていますね。活字にな



露口 卓也
大学文学部教授、
同志社社史資料センター所長

っているものは3種類くらいだと思いますが。

湯田 ●八重が注目される点として、女性でありながら銃を取って戦いに出向いたというのが、一つの大きなポイントだと思うんですね。その場合、「幕末のジャンヌ・ダルク」という表現もされることから、一般的には、他の藩士を率いて敵に立ち向かっていったという場面を想像しやすい。しかし実際には、八重が女性であることは変えようのない事実です。籠城という危急時であったとしても、八重の働きに藩士たちが進んで率いられていったというのは考えにくいと思います。会津藩の体質としても、女性が前面に出ることをよしとしない風潮が強かった

いていて思うのは、男性が前面に出る藩で、八重は、どちらかというと男親の影響を強く受けているのではないかと思います。ちょっと男っぽい部分があり、「悲しい」というより「悔しい」という感情を持つ。そういう女性は、当時は少なかつたのではないか。あの時代の女性像というのは、史料から見えてくるものなんでしょうか。

阿部 ●戊辰戦争の頃の女性は、ひと口に会津藩といっても、いろいろな対応の仕方がありました。家老の西郷頼母の家族のように皆が自刃を選ぶということもありましたし、女性だけの隊を指揮した中野孝子・竹子母子のように、なぎなたで打つて出る女性もいましたし、農村部へ避難した人もありました。いずれの道を選ばにしても、女性が鉄砲を持って戦うというのは、他藩でもなかなかなかったケースだと思います。この点は、八重自身のキャラクターによるもの大きいのではないかと思います。

露口 ●明治時代に八重が語ったことは、それぞれ聴き手がいて、その相手に合わせた語りになっていた部分があったでし

ようし、その話をまとめたのもまた、相手なんです。八重が自分で添削したわけでも何でもありません。だから、聴き手によって都合のよい話にまとめられていたかもしれない。それはよく分かります。

湯田 ●これは個人的な感覚ですが、籠城して女性たちが戦うという大変珍しい状況の根底には、彼女たちは武家の女性だったということが一つの大きなポイントになっていたのではないかと思います。武士の階級は特権階級ですので、他の人たちの手本になる生き方をしなければならぬという考えはあったと思います。籠城戦では特に家柄の高い女性たちが城内を指揮したと言われていますから、身分が高ければ高いほど、そういう意識を持つていたのではないかと。武家の人間として、恥ずかしい行いはできないと。その中で西郷頼母の家族のように、敵の辱めを受けるくらいなら自刃するという方向にいった人もいたでしょう。会津とい

うアイデンティティーと武家の人間であるということ、とても重要だったと思います。それが女性としてあのような戦

と思いますので、そういう意味では、八重の戦いは独自のものがあつたと思います。

露口 ●それはそうですね。

湯田 ●それから八重以外の方の回想録を読んで、とても疑問に思ったことがあります。鶴ヶ城の鉄門で、八重が藩主に直接、砲弾の解説をしていたという回想です。これは本当だろうか。女性が藩主の前でそういう行為をするのが許されることなど、当時ではとても考えられません。ただ、その方が目にしたものを自分の言葉で書いた記録なので、嘘ではないだろうとも思います。もしこの話が本当なら、会津藩は籠城という非日常下で、大きな方針転換をせざるをえなかったのだらうと思います。

小枝 ●八重についてはいろんなエピソードがありますね。たとえば日中戦争時に「戦争あがりのおてんば娘ですから」などと、将校関係者に対して話している。

『会津戊辰戦争』の著者である平石弁蔵さんにも、幼い頃の自分の特徴的なエピソードを、少し誇張して話すこともあつただらうと思います。湯田さんの話を聞

いぶりを見せたところへと、つながっていったのではと思います。

会津を思い続けた
京都時代の八重

露口 ●僕もその通りだと思います。そして生き残った人たちが、あの会津戦争を共通体験としながら、明治を生きていった。けれども、人にはいろいろな生き方がある。だから、明治以後の生き方を一色に塗りつぶして語ることはできないと思います。あの戦争で受けた大きな傷痕からは誰もが逃げられなかっただろうけれど、明治時代をどう生きるかは、それぞれに与えられた環境もあるだろうし、考え方の違いもあつたでしょう。そこでようやく、京都時代の八重に話を移したいと思います。京都時代の八重にとつて、会津時代の体験はどう生きていたのでしょうか。

小枝 ●それについては、手紙も史料もありなく、物から類推するしかありません。9月の展示は良い契機になりました。今まで未整理で残されていた新島家の6

〇〇点の写真の中に、八重が残した写真が22点あります。鶴ヶ城関係が4点、あとは会津若松の名所が写されたもので、絵はがきのように売られたもので、それほど珍しいものではないのですが、写真の裏に八重の直筆で写真のタイトルが書いてある。これを、どう理解するか。僕は最終的には、八重はその写真を大切にしていたと理解をしました。他には、篤志看護婦の仲間や当時の患者さんとの集合写真、裏がイタリヤで買ってきた写真などが600枚の中に含まれます。ということ、この写真群は、八重にとつて残しておくべきものだったということが、少なくとも客観的に言えるだろう。その上で、裏に墨書きがあつたり、白虎隊のお墓の写真には、八重が砲術を教えた伊東悋次郎の名が見えたりする。磐梯山の写真もあります。

露口●どういう気持ちで、それらの写真を持つていたのでしょうか。

小枝●会津の写真を撮った時期は、裏が永眠する前後までくらいです。それをきれいに残していたことから、八重が故郷をどう思っていたかを察することができ

ると思います。和歌では会津に自分の心が帰れたらという歌がありますが、現代は誰の目で見ても、写真が一番分かりやすいですね。

露口●八重さんの詠んだ和歌はたくさんあるのですか。

小枝●いくつか残っています。「帰らざることしれどもいくたびか 思いいたして ぬるる袖かな」などは、いつ書いたのかは分かりませんが、故郷を思う歌ですね。「千代ふとも いろもかわらぬ若松の 木の下かげに 遊ぶむれつる」が、いちばん象徴的だと思います。八重は同志社に来てからも、会津の人が来れば温かく迎えるなどしています。また、八重は会津にも行きました。いま分かっているだけでも、裏と帰っているし、大正10年と昭和5年にも帰郷しています。故郷には帰れないけれど、会津という文化情景は八重の中に存在している。

露口●新島裏が生きている間も、会津の話は夫婦の間でよくしたであろうと想像されます。

小枝●ただ、戊辰戦争の時に日本にいなかった裏と、会津にいた八重が、どう係

は精神的にとても難しいと思うのですが、八重は何が起ころうともしつかりと構えていた。自分なりのスタンスが、ちゃんとありました。そこが八重の魅力であり、わたし個人としても学ぶところが多いと常々思っています。

怒ることはなかっただろうと私は思います。むしろ八重は家訓の精神を咀嚼して、体にしみ込ませていた。それが一つの強さになったのだと思います。

露口●具体的には、家訓のどの条文が関係していますか。

阿部●八重によく通じていると思うのは、十二条と十三条です。十二条は「政事は利害を以て道理を枉げずべからず、兪儀は私意を挟み人の言を拒むべからず、思う所を蔵さずして以てこれを争うべし、甚だ相争うといえども我意を介さむべからず」です。家訓には、会津藩中期の家老が注釈をつけたものが残っています。それによると十二条は、「人が行わなくてはいけないことを捨てて利害をもつばらにすれば、下の者もそれに習い、ついに主君を殺すようになってしまふ。たくさんの人で評議を行う時は、自分の了解を押し通して、他の人の良い意見を拒むことのないようにせよ。道理に気づいたら、後難が身に及ぶことを恐れずに意見せよ。評定の時、意見が対立したら、自分の意見を押し通して他人の意見を押し伏せることをせず、とにかく道理次第に

係しているか。怒ることはなかっただろうと私は思います。むしろ八重は家訓の精神を咀嚼して、体にしみ込ませていた。それが一つの強さになったのだと思います。

せよ」と解説されています。なかなか解釈が難しい内容ではありますが、とにかく道理に従って物事を進めなさいということ。十三条は「法を犯す者は有むべからず」。法度に少しでも背くものがあれば、その者を許さず、その罪相応に処罰せよという意味です。もしそういう者を放置すれば、命令は聞かなくてもよいことになってしまうし、政事にも支障が出る。それに、もともと人は法度に背きやすいものである。そのため、法度に背くものをすべて刑罰に処すことができなくなり、背いた者を徐々に許すようになる傾向がある。このため、法度の数を少なくすれば法に背く者も自然に少なくなる、という考え方です。

八重も兄嫁の不貞に対して厳しかったです。だめなものはだめであるという部分がありました。これらの人となりは、家訓によって血や骨になった部分があつたのだと思います。そういうものを会津藩全体で共有していた中で、お父さんや、お兄さんの山本覚馬からの感化も大きかった。推測の域は出ませんが、そういう土壌に育つたことが、八重の精神を

「家訓」に見る 八重の精神的基盤

露口●八重の強さ、明るさは、どうやって培われたのでしょうか。

阿部●八重の強さを形作ったものの一つに、会津藩の家訓があると感じています。というのは、平石弁蔵との対話の中で、八重が家訓について語っている場面があるのです。そこでは、家訓を「畢竟、土津様(※保科正之のこと)の御遺訓たる寡言実行の精神を發揮されたもの」という言い方をしています。つまり会津藩の家訓に対して、言うより行う精神である、八重は受け止めている。家訓十五条の中には、「婦女子の言、一切聞くべからず」というものもありますけれども、当時の婦女子は、この家訓の条項を見て

価値観をすり合わせたのか。僕にとつて、これは最大の疑問です。先ほどからも話に出てるように、会津藩の人たちは同じ思いを胸に生きていった。ところが裏は、全然違うところにいました。残っている史料は仲の良いことを示すものしかないのですが、ますます不思議です。むしろ八重が、裏のこを受け入れていたような姿勢が見える手紙ばかりですから。ただ、八重は結婚前には戊辰戦争の体験を語っているようです。

湯田●会津の人たちが抱いていた思いは、夫婦の間でも共有できなかったと思うんですね。あとで言葉や文字で伝え合うことはできたとしても、その共有できない思いは八重のあり方として、全部受け止めていたのが裏だったのではと、私は勝手に想像するのですが。

阿部●八重のすごさを一番感じるのは、戊辰戦争を生き抜いて大変な経歴をし、また身近な人との別れも次々に訪れているのに、悲壮感が漂っていない点です。どんな場面からも、前向きな姿勢が見て取れます。特に現代に置き換えて考えると、あれだけの辛い体験を乗り越えるの

いったのでしよう。キリスト教についても、八重自身の道理があつたのかなと思います。だから、曲げなかつた。京都時代の八重の生き方も、家訓からも分かるような、そういう精神性の表れなのかなと思いました。

露口●会津の人でなければ分からないことなのですね。

小枝●会津の人たちは、とても心穏やかで親切な人ばかりです。でも僕は会津であつた共通体験や、共通意識を持ちようのない県外人です。会津の人でなければ分からないものがあります。だからこそ会津の人たちは郷土愛が強いのかなと思います。一方で、同志社時代以降の八重の活動をどう理解していくのか。特に、篤志看護婦のように社会的影響力のある人間として、国策に乗りながら、女性として自分の存在や看護婦の地位向上をめざして活動した。その背景にあつたものは何だったのか。これはちよつとセンチメンタルな考えですが、一つには、八重自身が遺族になつたことが大きかつたと思います。でも今日の話を聞くと、後年の八重には、また別の背景があつたのだ



培つたのではないかと思います。

湯田●山川捨松のお母さんの艶さんについて、捨松の兄の山川健次郎が回想している文があります。お母さんは教育熱心で、特に変わったことをしていたわけではなかつたけれども、道に背くことだけは決して許さなかつたと。確かにそういう気風は会津に根づいていて、当たり前になって透していたのかなと思います。

露口●会津という風土で、おのずから培われたものなのですね。今の話は、まさに八重

の精神力がどういうものであつたかを考える上で大きい意味がありますね。

湯田●八重は京都に移り住んで何十年経つても、たぶん会津への思いはずつと色あせなかつたと思います。それが、昭和3年の写真からも分かります。これは、松平容保の孫である勢津子様と秩父宮様とのご成婚時に八重が東京へお祝いに駆けつけ、撮影した写真です。あのご成婚は会津藩にとって、戊辰戦争以来の朝敵という汚名を返上できたものでした。それだけ会津の人に重くのしかかつていた戊辰戦争での出来事が、60年を経てひと区切りついた。八重にとつても会津への思いは、ずつと心の一番底に残つていたのではないのでしょうか。

小枝●会津に行つて思うことは、会津の人たちにとつて保科正之と会津藩との関係はある意味自明のことであるし、戊辰戦争での経験は、自分の中ではとても清算できないことのように感じます。先ほどもお話にあつたように、それをアイデンティティーにしてこれから会津の人は生きていくのだらうと思います。八重自身も、そういう部分は感じながら生きて

らうかと感じました。赤十字の仕事にしても、看護活動だけではなく、患者の向こうにいるご遺族に対して経済支援をする。あるいは、戦争以外でも身体に障がいがある人を支援する、貧困層へ寄付行為をする団体に関わる。今日のお話は、八重のこれらの活動をどう理解するのかわからないところへ関わっていくと思いますし、これをどう紐解いていくかは僕たちの研究使命であろうとも思います。阿部さんと湯田さんが八重の史料を通じて、新しいどのような視点を提示して下さいるか今後楽しみです。今日はとても勉強になりました。

露口●本日は長きにわたり、ありがとうございました。

(2012年12月6日今出川キャンパス・クラーク記念館)

